

## 修学月旅行

金井中学校 一年

金澤 凜空かなざわ りく

帰りの会で先生が言つた。

「修学旅行は月に行きます。」

え…？ 僕の頭には「？」しか浮かんでこなかつた。

「どうだ、今っぽくていいだろう。」

先生はそう言つたが、冗談としか思えなかつた。僕たちの学年は三十人しかいない。それでも全員で月へ行くなんて。他のみんなも冗談としか思つていなかつた。

それから一週間が経ち、いよいよ修学旅行当日になつた。

「はい、それではみなさん、トイレを済ませたら、順番にロケットに乗りましよう。」

先生が指差した方向を見ると、本当にロケットがあつた。観光バスくらいの大きさだつた。おそるおそる中に入ると、ぎゅうぎゅうに座席が並んでいて、頑丈そうなシートベルトが付いていた。座席の後ろのスペースには宇宙服がずらりと壁にかかつっていた。本当だつたんだ…。シートベルトをしめながら、僕は不安やわくわく、いろんな気持ちが湧き出でてきた。

「それでは発射しまーす。」

先生ののんきな声と共に、大きな地響きを立ててロケットが発射した。その後のことは衝撃がすごすぎて残念ながら覚えていない。どのくらい時間が経つたのだろう。先生の声でふつと目が覚めた。

「そろそろ月に到着しまーす。シートベルトはそのままでお待ちください。」

窓の外を見ると、映画で見たことのあるような景色が広がつていて、ロケットの中が歎声に包まれた。すごいぞ！

着陸の衝撃もすごかつたけど、今度は気絶せずに済んだ。先生の指示を聞きながら、みんなで宇宙服を着込んだ。本当の宇宙飛行士になつた気分だ。みんなスマホで写真を撮り合つたりしてはしやいでいる。

そしていよいよロケットの外に踏み出した。なんだか体がふわふわする。少し跳んだだけで体が高く浮き上がり、まるでゲームの世界に入り込んだみたい。

「みんな楽しんでるね。それでは、この観察シートに気付いたことを書き込んでいいってね。写真を撮つてもいいですよ。」

審査員賞  
金澤凜空「修学月旅行」

いつも使っているおなじみの観察シートだけど、場所が違うだけでとても新鮮に感じる。

僕もみんなも真剣に観察を続けた。月の表面は灰色で地球みたいな色がない。草木も生えていないから石ころだらけの砂漠みたいだ。色のせいか、とてもひつそりとした感じがする。そんなことをまとめているうちに地球に帰る時間になってしまった。

なごりおしさもあるけれど、地球に帰れるという安心感でいっぱいになり、みんなで楽しくおしゃべりしながらロケットに乗り込んだ。宇宙服を脱いで座席に座り、シートベルトをしっかりとしめて発射を待った。あれ？ なかなか発射しないな。みんながざわざわし始めた時、先生が申し訳なさそうにこちらを見て言つた。

「みんなごめん：先生、月に着いて嬉しくなつちやつて、ロケットのエンジン切り忘れてたみたいで：ガス欠です：ロケットが動かないんです：」

「ええー！」

ロケットの中に大絶叫が響き渡つた。大ブーリングだ。泣いている子もいる。僕だって泣きたい。

「みんなでどうやつたら帰れるか考えましょう。」

半泣きの先生が深々と頭を下げたところでパチッと目が覚めた。急いで周りを見渡す。僕のふとん、僕の部屋。夢で良かった…。安心して大きなため息をついた僕を子猫のミイが心配そうに見上げている。僕はミイをだっこしてなでた。やっぱり地球が一番だ。いつもの朝食を食べて登校する。いつもどおりの学校で授業を受けた。

帰りの会で先生が言つた。

「修学旅行は月に行きます。」

### 審査員賞

金澤凜空「修学月旅行」

#### 審査員講評 \*\*\*\*\*

描写が素晴らしい、本当にいま自分も月に行っているかのように錯覚しました。ぼく自身、宇宙へ修学旅行や遠足に行く作品を書いてきましたが、月で観察シートを書く場面など、自分には絶対に書けないと唸りました。ラストのループ構造もいいですね。月への旅行が現実味を帯びてきた昨今、いつか本当にこんなことが実現したらと夢が膨らみました。